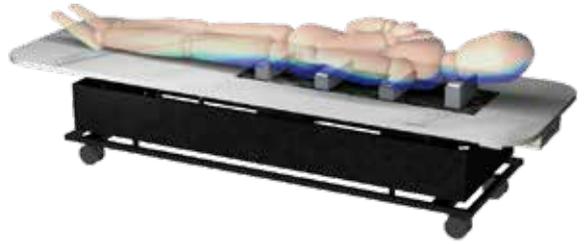


独自冷却方式で遺体を保全し コスト削減と作業効率アップ 「メモリアルベッド」

(株)ドウシシャ [東京都品川区]



導入事例① ▶ ▶ ▶ (株)ライムメンバーズ [群馬県高崎市]

安置期間が長期化するエリアで ドライアイスのコスト削減を狙って導入

1966年に設立した冠婚葬祭互助会の(株)ライムメンバーズは、群馬県高崎市内に4つの直営会館を展開し、年間450件を施行する。

同社では、2018年7月からドウシシャのメモリアルベッドを導入し、現在は「アウラ緑町会館」「アウラ江木会館」「アウラ本郷会館」の3会館に導入。主に会館内でのご遺体安置に使用している。

近年、市内では病院などで亡くなった遺体を自宅に返さず、会館に直接移送して安置するケースが増加。また市町村合併で火葬件数が増加したことによる火葬待ちや宗教者のスケジュールなどの都合で安置日数が長期化し、長いときには1週間安置することもあるという。

「安置期間が延びることでドライアイスのコストがかなりかかっており、ドライアイスに代わる冷却方式がないかと探していたところ、メモリアルベッドの存在を知りました」と、同社葬祭部マネージャーの井田伸博氏は語る。

同社の会館は、遺族控室内に柩を置くスペースを設けているが、メモリアルベッドはそのスペースにちょうど収まるサイズだったので、女性スタッフでも会館内でも好都合だった。これまで、遺族

控室に遺体を安置する際には畳の上に布団を敷いて安置していたが、柩のスペースにメモリアルベッドを設置し、その上に遺体を安置することで、控室内のスペースを効率よく使用することができる。居住スペースが広がったことで、遺族にも好評だという。

遺体の保存状態についても万全で、1週間ほど安置が続いても遺体の肌色も変わらず、自然なままだったという。また、1日1回程度必要だったドライアイス交換の手間も省け、作業効率が改善されている。

「正直、最初にご遺体がちゃんと冷却されているのか半信半疑で、念のためドライアイスと併用していたのです。でも徐々に冷却効果が実感でき、ドライアイスとの併用もなくなりました」と同社葬祭部課長の鈴木俊介氏。結果的に、ドライアイスの使用量は導入前の3分の1程度に減少し、コスト削減につながっている。

日常的なメンテナンスは、冷却ブロックの表面に結露した水滴を拭き取る程度なので、運用の手間もかからない。キャスター付きなので、女性スタッフでも会館内を自由に移動できる。



(株)ライムメンバーズ葬祭部マネージャーの井田伸博氏(右)と同課長の鈴木俊介氏



遺族控室内の柩設置スペースにぴったり収まるメモリアルベッド。この上にご遺体を安置することで、控室内を広々と使うことができる

ドライアイスから排出されるCO²は地球温暖化の原因にもなっており、葬儀業界内でも使用量削減を求める声があったが、ご遺体冷却においてドライアイスの使い勝手がよかったので、これまでなかなか削減は進まなかった。

「ドライアイスに代わる、効率のいい冷却方式が出てきたことで、葬儀業界も徐々に意識を変えていかなければいけない時期にきている」と鈴木課長は指摘する。さらに、井田マネージャーは「ご安置のために保冷库を導入されるところも多いが、いかにも『冷えています』という感じがし、冷たい感じがします。ご安置の場合、ご遺体への影響や使い勝手、環境問題などを考えるとメモリアルベッドをお勧めします」と話す。

(株)ドウシシャが取り扱う「メモリアルベッド」は、従来型の保冷庫やドライアイスを使った冷却方式とは異なる、まったく新しい冷却システムを採用。冷却ブロックで遺体の深部までしっかり冷却しつつ、見た目を自然な状態に保つことができる。さらにドライアイスのコストを大幅に削減し、交換作業の手間を軽減するなど導入メリットは大きい。今回は、遺体冷却装置「メモリアルベッド」(以前の商品名は「エコクール※」)を導入した2社に、導入の意図や使い勝手などについて伺った。

※現在、(株)ドウシシャと提携している(株)エコテクノが扱っていた商品名

連絡先

(株)ドウシシャ 特販部

所在地/東京都品川区東大井1-8-10

TEL: 03-3474-6853

FAX: 03-3474-6908

E-mail: info@memorialbed.com

http://memorialbed.com/

http://www.doshisha.co.jp/

導入事例② ▶ ▶ ▶ 泉屋(株) [大阪市中央区]

ご遺体を自然な状態でしっかり保存 設置場所に合わせたカスタマイズにも満足

1754(宝暦4)年創業の長い歴史をもつ泉屋(株)は、仏壇販売で事業基盤を築き、葬儀業へと業容を拡大した。現在は大阪府内7か所、奈良県内4か所の葬祭会館を直営し、年間約1,800件を施行する。

同社では2015年9月、大阪市中央区の「谷町メモリアルホール」に遺体冷却装置を導入、その後「高井田メモリアルホール」「長尾メモリアルホール」「香芝メモリアルホール」の計4会館に順次導入している。

導入の意図について、同社取締役葬祭部長の川口正明氏はこう説明する。

「従来のドライアイスでの冷却方式では、ご遺体が固く硬直したり、お顔やお肌の表面に霜がつくなど非常に不自然な状態になってしまい、“何かほかにいい冷却方法はなにか”と常に考えていました。近年はさまざまな冷却技術が開発され、弊社でも試用してみたのですが、使い勝手がいまひとつで正式導入には至らなかった。そのようなときに遺体冷却装置を紹介していただいたのです。」

遺体を自然な状態に保ったまま、しっかり冷却保存できるといふ遺体冷却装置に興味をもった川

口氏は、さっそく試験的な導入に踏み切った。

導入にあたっては、設置場所に合わせたサイズや高さなどを細かく指定したという。

「会館の図面をお渡しして、かなり細かな要望をお伝えしたところ、全部聞き入れてくれたので、メーカーさんに対する信頼度が一気に上がりました」(川口氏)

実際に使用してみると、遺体の硬直なども見られず、肌も柔らかく自然な状態で保存できることがわかった。遺体があまりに自然な状態だったため、葬儀スタッフが「完全に冷却できていないのではないか」と不安になったほどだという。

また、これまでは遺体安置時にドライアイスを設置する作業に時間がかかっていたが、遺体冷却装置導入後はそうした時間を短縮でき、そのぶん遺族との打ち合わせに時間を割くことができるようになった。ドライアイス交換の手間もなくなり、スタッフの作業効率アップにもつながっている。

さらに、「遺体冷却装置の使用を重ねていると使い勝手に関して改善してほしいところも出てきますが、その要望をメーカーに伝え



設置場所や使い勝手などの細かい要望にあわせてカスタマイズされた遺体冷却装置。その使い勝手には満足しているという

たところ、すぐに応えてくれました」(川口氏)と語るように、メンテナンス力も高い。

最終的に計4会館に遺体冷却装置を導入した結果、ドライアイスの使用機会は自宅安置や寺院葬などに限定され、使用量は導入前の約4分の1程度にまで減少、50~70%のコストダウンにも成功した。なお、納棺後にはドライアイスを使用している。

「お客様のなかにも、ドライアイスによるご遺体の硬直は“仕方のないこと”と考えている方は少なくありません。そうしたお客様にも、ご遺体を自然な状態に保てる遺体冷却装置をアピールすることができると思っています。何よりも18年2月に義父にも使用した際、身体に優しいのがいちばんで自然な感じで安心でした」と川口氏が指摘するとおり、活用次第では喪家満足度の向上にも大きく寄与するだろう。